

---

Angel Beats! **死んだ世界の刀鍛冶**

紅焰

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Angel Beats！ 死んだ世界の刀鍛冶

### 【Nコード】

N2011N

### 【作者名】

紅焔

### 【あらすじ】

この作品はオリ主「御鋼<sup>みはがね</sup> 剣<sup>つるぎ</sup>」が音無の来た次の日に来たという設定で進めたいと思います。  
駄文ですがよろしく願います。

#1 理不尽な死（前書き）

駄文ですがよろしくお願いします。

## #1 理不尽な死

刀鍛冶という職業を知っているだろうか。文字通り刀を作る職業だ。そんな職業の家に俺こと『御鋼 剣』は生まれた。

親父が言うには、俺にはずば抜けた才能があるらしい。小三の時から修行を初め、何度も挫折しかけたが、中二になってすぐに一本目の刀を打つことを許された。

俺は早々に製作を始め、何日間もかけて最初の一本を作り上げた。親父に『初めてにしては筋が良い』と言われ、嬉しくなった俺は一層修行に励んだ。

それから、一年ほどで様々な種類の刀を打った。

よく知られている、打刀（最初に打ったものと同種）から、直刀、太刀、小太刀、大太刀、薙刀、他にも大剣やら槍やらも作った。

そんなこんなで、俺はそれなりに充実した人生を送っていた。

……だが。

雨の降る夜、些細な出来事が発端で俺の人生は終わりを告げた。

母親が俺の盾になって殺され、親父が斬られ、家中を逃げ回り鍛冶場にあった刀を使い戦ったものの行き成りの真剣での斬り合いに恐怖して出来た一瞬の隙に心臓を一突きにされ俺は死んだ。

そして俺は、死後の世界へ飛ばされた（……）。

## # 1 理不尽な死（後書き）

誤字脱字等あったらよろしくお願いします。

## #2 死んだ世界戦線

side - 剣 -

「うわああああ！」

俺は叫び声を上げながら起きあがった。

「あれ、ここどこだ？俺、死んだはずじゃ」

周りを見回すと、さっきまで俺の目に映っていた火の海は無く、夜の静寂が支配する学校だった。

「が、学校？」

俺は更に周りを観察していると、先ほどまで暗くて見えなかった場所に月光が射し、銃と肩に『rebels against the god』と書かれたワッペンが刺繍されている制服を着た女が映し出され、女は俺が起きたのに気付くと「目が覚めた？ようこそ死んだ世界戦線へ」と言った。

「は？てかあんた誰？」

俺がそう聞くと女は言った。

「唐突だけど、あなた入隊してくれないかしら？」

「入隊？ってか質問の答えになってねえぞ」

俺は不満を口にするが、女は気にも留めず話を続ける。

「ここに居るってことはあなた死んだのよ」

「……………は？」

少女の言葉に俺が全然わかりませんのポーズをとるが、それを無視して女は喋り続ける。

「ここは『死んだ後の世界』何もしなければ消されるわよ」

「消される？誰に」

信じたわけではないが俺はとりあえず女の話聞くことにした。

「そりゃ神様でしょうね」

『神』という単語に、いつもの俺なら「そんな馬鹿な話があるかよ」と笑って済ませるが、言葉にはせず次の質問に移る。

「じゃあ入隊って何？」

「死んだ世界戦線によ。まあ部隊名は良く変わるわ最初は『死んだ世界戦線』まあ今もただけでも死んだ

世界戦線って死んだことを認めたことになるんじゃないか？ということにより破棄。以降へんせいを続けているわ。昨日までは『死んでたまるか戦線』その前は『生きた心地がしない戦線』ま、完全にネタだったから一日で変わったけど」

「え〜と、じゃあ次の質問」

「なに？」

俺は少女が反応したのを確認してから質問する。

「その君が持っている物騒な物はとりあえず話の流れからして本物、またはそれに値する性能を持った何かだというのは大体分かる」

ここで一旦言葉を切り、女の反応を見る。

「ええ、この銃は本物よ良く分かったわね」

女はそれに、と続ける。

「あなたはそれなりに頭も働くみたいね、ここに来るやつは皆「その銃本物？」とか聞いてくるのよ！ほんとうにむかつくわ！」

「……」

俺が少女の事をジト目で見ると、女は慌てて平静を装い（いまさら遅いが）咳払いして話を戻す。

「で、質問ってなに？」

俺は今度はもったいぶらずに言った。

「その銃を向けている相手は誰かってことだ」

「アレよ」

と言って女は肯定の真ん中を指差した。

「あれが死んだ世界戦線の敵『天使』よ」

だが、指差した先にいたのはただの少女だった。

## #2 死んだ世界戦線（後書き）

感想、誤字脱字、アドバイスお願いします。

### #3 天使（前書き）

編集終わった（＾０＾）／＼  
でも、駄文であることに変わりはない（キリッ）

### #3 天使

side - 剣 -

「あれが死んだ世界戦線の敵『天使』よ」

だが、女が指差した先にいたのはただの少女だった。

「……え〜と俺、向こう行くんで」

「はあ！？何で！わけ分かんないどうしたらそんな思考に至るわけ！あんたバカじゃないの！一遍死んだら！？……これは死ねない世界でよく使われるジョークなんだけど、どう？笑えるかしら？」

女は一息にそう叫ぶと意味の分からないジョークを言い、その感想を求めてきた。

「ジョークの感想はいいとして、少なくとも女の子に銃を向けてる危なっかしい奴よりはちゃんとした話ができそうだからな」

そう言っただけ俺は、立ち上がりグラウンドへ足を向ける。

「待ちなさい！私はあなたの味方よ、銃を向けるなと言っただけなら向けないわ！だから、私を信用しなさい」

女はグラウンドへ向かおうとする、俺を呼び止める。

「お〜い、ゆりっぺ〜新人勧誘の手はずはどうなってんだ？もう一人メンバーが増えるいい機会だ今度こそ一発で入れるために脅すな

りなんなりして！って……あれ？」

空気が凍りついた。

「うん！俺、やっぱり向こう行くことにするわ。じゃあな！」

俺は風のようにまさに、疾風のごとく………「ごめん、作品間違えた。」

「また失敗したああああ！！あんたバカなの！昨日と同じ失敗してどうすんのよ……！」

そう叫んで、女が青い髪の青年を蹴り飛ばすのを眼の端で捉えたが気にせず女の子の所へ向かった。

「え〜と、こんばんは〜でいいんだよな？なんか銃で狙われてたけど、天使がどうたら言いながら」

俺は、天使と呼ばれていた女の子（以後、名前知らないから天使）に狙われていた事を伝える。

「昨日の人と同じような事を言うのね」

「昨日の人？じゃあ、そいつは他になんか言ってたか？」

俺はさっきの怪しい奴らも『また』とか『昨日と同じ』とか言ってたが、それと何か関係があるのだろうか？

「私が、この世界の人間が死なないと教えたら『死なないのならそれを証明してくれ』って言うってきた」

天使は表情を変えず淡々と答える。

「それで君は何て答えたんだ？」

「じつ『hands on a c』」

天使が何かを呟くと右手のあたりが発光した直後、胸に鋭い痛みが走り、だんだんと熱くなっていくのを感じ、俺の意識は闇に落ちた。

### #3 天使（後書き）

文章自体は大幅に改編しましたが、内容には大した差はないです。  
感想お願いします。

#### #4 斧男参上(前書き)

もはや、編集前と内容全く違います。

#### # 4 斧男参上

「うわああああ!!!!.....つてあれ?傷が消えてる?」

剣は刺された胸を触って確認するが傷は無く、痛みも無い。

「確かにあの時、刺されたよな.....」

剣はしばらく考えを巡らせ、一つの結論を導きだした。

「そっか!きつと夢か何かだよなあっはっはっは!!!そっいや  
服着てねえな」

そう呟きながら、右にあったパイプ椅子に乘せられているシャツを  
摘みあげると『バシヤツ』と音を立てて血が滴り落ちる。

「!?!.....こ、混乱なう」

やっとひねり出した言葉がこれである。

「.....つて、バカアアア!!!んな事言ってる場合か!」

俺はまだに混乱している頭で思考を巡らせながら、血塗れのシャツ  
を投げ捨て、その場を離れようとしてかろうじて無事だった、学ラ  
ンを羽織り、扉をに手を掛け開けた。

「先には、斧を持った男が立っていました」

正確には斧ではなくハルバードという斧と槍を組み合わせたような



「クソがああああ!!」

追い詰められた俺は、手近にあったパイプ椅子を斧男目掛けて投げ付けた。

「そんな物!」

斧男は椅子をハルバードで切り裂くが、そこに一瞬の隙が生まれ、それを剣が見逃すはずもなく一瞬で斧男に接近してハルバードの柄の中心あたりを掴む。

「何のつもりだ!」

武器を掴まれ動けない斧男が俺に向かい叫ぶ。

「簡単なことだ!小学校の理科で教わるレベルのな!!」

そう言いながら俺は、ハルバードの刃に強烈な踵落としを叩き込んだ。後は本当に簡単な話だ、中心を押さえた棒の片方に強烈な力を加えらるともう片方が跳ね上がる。つまりはテコの原理が働く訳でハルバードの柄はそのまま跳ね上がって、斧男の顎に直撃するわけだ。

「がはっ!」

斧男は、そのまま気絶した。

「よし……逃げるか」

そして、俺は保健室を後にした。

## 5 校長室（前書き）

やっと編集が終わって、久々の投稿なので、完成度が多少低いです。

## 5 校長室

保健室から逃走して間も無く、俺は早々に悩んでいた。

「これからどうすりゃいいんだ……」

悩むのも当たり前である。いきなり、知らない場所で目覚めて、しかも変な女に絡まれるし。

……刺されたし、命狙われるし。

「散々だな、本当になんなんだここは、死んでも少ししたら生き返るし、会うやつ皆、銃刀法違反者だし……。ここには誰かまともな奴はいねえのかよ」

そうしているうちに、あることに気付いた。

「そついやまだ大人に会って無いな」

大人ならまともな奴がいるだろう！と考えた俺は、都合良くここは学校であることを思い出した。

（とりあえず校長室いけば校長はいるだろ、いつも暇そう）（偏見です）だし）

（校長室前廊下）

「やっと見つけたぞ校長室」

そう呟きながら校長室の扉のドアノブに手を掛け、ひねった瞬間、

天井がスライドし巨大なハンマーが出現、俺に向かい突っ込んできた。

「げ！」

次の瞬間、ハンマーは窓枠ごとガラスを吹き飛ばした。俺はギリギリで校長室に転がり込んだ為助かったが、一瞬でも反応するのが遅れていたら間違いなく窓ガラスからサヨウナラしていたところだ。などと転がりながら考えていると、ゴスツという音と同時に頭に鈍い痛みが走り、俺の意識はあまりにもあっさり闇に落ちた。

「しかし、良くあのハンマー避けられたなこいつ」

俺が目覚めると近くから若い男の声が聞こえ、俺は上半身だけを起こして声したの方に顔を向けると、そこにはここにきて最初に会った女が着ていた制服に酷似した物を着た青年が座っていた。青年はこちらに気づくと俺に向かって話し掛けてきた。

「お、やっと目が覚めたか。おはよう」

青年の言葉に俺は、まだ活性しきっていない脳をフルに使って答えた。

「お、おはよう？」

俺は起き上がるうとし、腕に力を入れると床とは違う柔らかい感触がして手元をみて、寝かされていたものが初めてソファードだと気付いた。

「いきなりで悪いが、俺は『音無』お前は？」

この、音無と名乗る青年は信用していいのかと一瞬答えることを躊躇うが、こいつをみていても敵意などは感じないし、言わなければきっと話は進まないだろうと思ひ名乗る。

「俺は、御鋼 剣だ。よろしく音無」

「ああ、よろしく。皆、おきたぞ」

俺との自己紹介を終えると、音無は後ろにいた人達（いたことには今気付いた）に向かってそう言った。

## 5 校長室（後書き）

今後は、なるべく早く更新したいと思っています。  
感想やアドバイスをお待ちしております！

## # 6 アホの刀鍛冶(前書き)

投稿が大幅に遅れてしまいまことに申し訳ございません。

携帯で書いたのでちょっとだけクオリティダウンしてます、すいません。

## #6 アホの刀鍛冶

ども、御鋼 剣です。

前回はハルバードを持った変な男に襲われ、撃退の後に話の分かりそうな大人を探して校長室まで行き、ドアノブに手を掛けた瞬間八ンマーが俺に襲いかかり、避けたものの何かに頭をぶつけて気絶、起きたら音無君がいて、自己紹介の後に部屋にいた奴らと呼んだんだ、以上！。

「おはよう、いきなりだけど戦線に入る気になった？」

「本当にいきなりですね」

「私はこの戦線のリーダーよ、よろしくね」

「無視ですかい、まあいいけど。じゃあ、一つ質問いいか？あの凶暴斧男もあんたの仲間？」

そう言つて、俺は壁際にいた男を指差す。

「ああ！何だ貴様もう一回やるか！？」

「やってやるうじやねえか！保健室の時のように返り討ちにしてやるぜ！！」

そう宣言して構えを作る。

「さっきは油断したが、今回はそうはいかないぞ」

斧男がハルバードを構えながらそう言う。

「それはどうかな？さっきまでは俺も加減してたからな」

そう言うって俺は余裕の笑みを浮かべる。

「ほざけ雑魚が、いくぞ！！」

そして、斧男は袈裟斬りを放つ、だが俺は最小限の動きでそれを避ける。

「おい、下見てみな」

斧男は、その言葉に反射的に下を見た。

「スキあり〜」

俺は小声でそう言うって、下を向いた奴の後頭部に踵落としを放つ。

ゴシヤ！

踵落としをもらにくらい、斧男の顔面が地面にめり込む。

「処理完了っつと」

一通り終わると、それを見ていたリーダーさんが近付いてきて話し掛けてきた。

「あなた、意外と強いよね」

「以外とは余計だ」

「私は、『ゆり』皆には『ゆりっぺ』とよばれてるわ。まあ、好きに呼んでくれて構わないわ」

また無視か、と思いつつ心のなかでネーミングセンスのなさを笑う。

「とりあえずメンバーを紹介するわ。あなたが起きた時に私たちを呼んだのが音無君、記憶喪失よ。で彼が」

と、言っつて青い髪の青年を指す。

「日向君、ちゃらんぽらんよ」

「っつて、前より酷くなってるじゃねえか！」

「で、彼が松下君」

と言っつて今度は目の細い大男を指した。

「柔道五段だから、皆は敬意を持って、『松下五段』と呼んでいるわ」

「よろしく」

「ん、よろしく」

俺は松下と握手を交わした。

「で彼が大山君特徴がないのが特徴よ」

「ようこそ戦線へ」

「ああ（紹介されるまで気づかなかった・・・てか、まだ入るか決めてねえし）」

「で彼が藤巻君」

そう言って、長ドス（本物かは不明）を持った男を指差す。

「藤巻だ坊主」

「坊主ってそんな歳かわんねえだろ」

「Come on, let's dance! OK . . .」

「別に構わんが、後でな」

「今のは彼なりの挨拶よ皆TKと呼んでいるけど、本名は誰も知らない謎の人物よ」

「そんながいていいのかこの団体は」

「いちいち眼鏡を持ち上げて知的に話すのは高松君ホントはバカよ」

いや、バカなのかよ！と、心の中でつつこむ。

「影ですっと『あさはかなり』って言ってるのは椎名さん」

「あさはかなり」

思わずつつこみそうになる衝動を抑え続きを聞く。

「で、ここに座ってるのが岩沢さんよ」

「.....」

俺は思わず黙り込んでしまった。

「どじしたの?」

「岩沢さん」

「なに?」

「俺と結婚して下さい!」

「.....はあああああ!?!」

皆が驚き叫ぶ中、音無がテンパりつつも、そもそもの原因を聞いてくる。

「ちょっと待て!!なんでそうなる!?!」

俺は躊躇せず、答える。

「モロタイプです!」

ここにいる全員が「こいつアホだ」そう考えた瞬間であった。

## # 6 アホの刀鍛冶（後書き）

感想など頂けると嬉しいです。

## 新年の挨拶と謝罪とアンケート（前書き）

名前が紅蓮緋龍から紅焰に変わりましたよろしくお願いします。

## 新年の挨拶と謝罪とアンケート

皆さん！大分遅くなってしまいました。明けましておめでとうございませう！

長い間更新しないまま、年が明けてしまったので気分を変えて次話の執筆にいそしんでいるのですが多少ネタ切れ中なのでもう少しお待ちいただくことになると思うので、どうか見放さないでください。

後、これからの方針についてアンケートを取ってみたいのですができればお答えください。

自分、連続転生物？的なものにハマりましてちょっと息抜きにそっちに繋げるストーリーで考えたら、以外にできそうなものなので、つとここからアンケートです。

？このままこの作品を完結させる。

？先ほど言った通りの話で書いてみる。（一つ上げるなら特殊能力的なものを搭載します）

？それ以外のアイデア募集

異常の項目から選んでください？の場合はできるだけ具体的にお願ひします。

という事で、今年もよろしくお願ひします！！

## 新年の挨拶と謝罪とアンケート（後書き）

剣・紅「後書きのコーナー」

ドンドンパフパフー

剣「えつと、次回から中々本文も書けなくせに駄作者が自分で作品を読んで後書きが寂しいとかほざき、こんなコーナーが開設されました」

紅「今回はその予行です！つてか説明酷くね!？」

剣「事実だろ」

紅「言い返せない(´・`・´)」

剣「具体的にこのコーナーは何なのかと言いますと、その時の本文の話をしたり、刀の種類の解説や、可能性は薄いですが質問やらのコメが来た時にそのコメントに答える等の事をします」

紅「まあ、そういう事なので皆さん」

剣・紅「次回もよろしくお願いします!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2011n/>

---

Angel Beats! 死んだ世界の刀鍛冶

2012年1月14日13時47分発行